

【凡例】

本稿は、松浦熙編述『亀岡随筆』全80巻（松浦史料博物館蔵）のうち、「巻六十八ノ二」（縦帳1冊・34丁）を選定し、翻刻するものである。

本巻を選定した理由のひとつは、二〇一五年から二〇一六年にかけて国の指定名勝となった長崎県佐世保市にある「平戸領地方八奇勝」（いわゆる「平戸八景」）の起源とされる「松浦八奇勝図」の漢文（貫名苞記）について、正確な訓読点および頭注が施されている点。および「平戸八景」の石橋・大悲観の由来・来歴に関する貴重な記述がある点である。「平戸八景」については、『国指定名勝平戸領地方八奇勝』（佐世保市文化財調査報告書第15集・二〇一六年七月）において精緻な研究がなされているが、『亀岡随筆』の記事は参考とされていない。

以上の点に鑑み、本稿では、とりわけ漢文表記を正確に復元することを念頭に、改行は原文通りとし、随筆の各頁数および頁内の行数を明記することとした。

また、翻刻にあたっては、以下の凡例を用いた。

- 1 校訂にあたり、松浦史料博物館が所蔵する「源本」（熙が自筆相当と認めた本）を底本とした。
- 2 収録された記事のタイトルについて、1～3の通番号を付けて（ ）で括って挿入した。
- 3 改行は、原文通りとした。
- 4 適宜、読点を補った。
- 5 随筆の収録頁数を明記し、各頁数内の行数を行頭に記した。

6 原文の漢字・仮名は、可能な限り、通用の字体にあらためた。

7 割り注は、「」を用いて記した。

8 見せ消ちは、原文の表記に従い、これを明記した。

9 朱書き部分は、ゴシック体によって記した。

10 原文の欠字・平出などについては、（ ）を用いて記した。

11 その他、校訂者による注記は（ ）を用いて記した。

なお、校訂者が利用した組版システム（ソフトウェア）の制約により、一部、ユニコード（Unicode）の文字が表示できなかった。則ち、以下の二箇所である。

● 10 頁 3 行目ルビ「セツ」の漢字は、「シ」の右に「切」。Unicode は、U+6C8F。

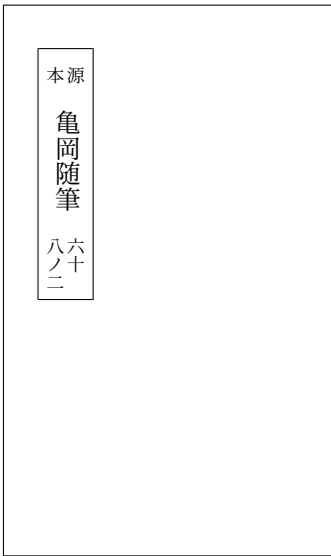
● 10 頁 5 行目ルビ「シク」の漢字は、「攸」の下に「火」。Unicode は、U+7102。

※本稿は科研費・基盤B「近世随筆の領域横断的研究」（課題番号 22H00638 代表者・川平敏文）による研究成果の一部である。

★付記 2026.4.29 校訂版作成

標題『龜岡隨筆』 卷 68-2

〔表紙〕



本源 龜岡隨筆 六十二

1 (地方八奇勝之事)

1頁

1 ○(乾嘉) 地方八奇勝之事

2 題松浦八奇勝図

3 肥之松浦鎮西、西角尽処、而、地之離、而、為、島者、為、平

4 戸、為、五龍、為、壱岐、五龍係他封、所謂八勝、在、松浦

5 侯之封内、侯之治乃在平戸島、八勝並属地方地

6 方者、謂不為島也、而地僻境幽、人非之治下、莫出此

7 途、出此道、亦非故探、則莫過勝所、之五龍及壱岐者、自

有津

2頁

1 埠、亦莫出此塗、勝因不得顯、故遊瓊浦者接踵而未

瓊浦、長崎ナリ
接踵、追々二行ナリ

2 曾知勝之在邇也、画史渡沢広繁、去年遊雲之松江、

3 踰年茲丁未夏、上商舡、抵下関、逕之平戸、至則老

4 侯乾齋公召見、命此図、抑游客、而遽奉命者何也、

5 蓋以下、公東觀之道曾出于京、広繁因得謁侍、左

6 右故也、嗚乎、勝奇如是而待、公始謁、亦可謂奇矣、

7 其命題言苞者何也、以繡梓之命、広繁歸京而從、

3頁

1 事故也、苞曾見一友、話遊平戸觀捕鯨、大羨其壯觀、

2 及遊瓊浦、歸塗出大村、徒馳想於海雲縹渺之外、不

3 能追、壯觀之跡、今猶以為憾、況知有、其奇勝乎、及閱

4 此図、憾滋甚、昔人有九十之歲、猶為名山之遊者、苞

5 雖已耄矣、而不可不喜結、重游良緣哉、是所以奉命

6 不辭也

7 弘化丁未無射月

貫名苞題

4頁

1 高巖之図

2 高巖 「在下松浦郡長坂村、去城三里」

3 高巖壁、立、奇狀万態、画家所謂折帶皴也、老松圍繞

4 下有清流、可掬、行旅到此、莫不企望、賞歎、

5 高巖千尺、瞰清流、蒼壁嵯峨、翠靄浮、行客停筇、何所

6 賞松風万壑、自蕭颯

雲、雲州ナリ

謁侍左右、御目通ニ
出ルナリ

繡梓、板刻スルナリ

5 洞窟如レ廊壓ドウクツクノアツス 古邱キウラ、半千羅漢俛堪マ、タヘタリトモナフニ、自将ラマサニ相伴ヒテ入ント

6 一喝カツ一聲セイ、心点頭マサニチンストウヲ
禪悦禪ノオモシロキ所ニ
高ク声ヲアゲヨフ

7 潮之目之図

10 頁

1 潮之目 「在リ早岐浦ニ、去レ城十三里ヲ」

2 浦口左、右築堤キツキイラ、約潮シウセツル、以防フセク汎溢ハニイツラ、其間可ハカリ五、六丈潮進ハカリ

3 退時、其勢湊シウセツル為ト怒瀧セバメ

4 浦頭、石対成門、潮汐タ、ンテ満干相吐吞マンカンヒトドンズ、激碎ケキサイ、洶騰キヤウトウ、噴フ白ハク

5 雪シユク然シテライホク雷逆ライハク又龍奮リヤウホン

6 右八奇勝在平戸侯封内地方ニ、半在ハリ松下松浦郡ニ、半在ハリ

7 彼杵郡、丁未四月、西遊詣平戸ニ、適蒙タマフ老侯召見ヲ、因テ

11 頁

1 命シ繁与ニ二臣僚ノ至リ其地ニ、画ニシ之詩ニシ之、且記ツ所在地名ノ、

2 如キ靈巖石橋之長短、皆ナレ是実就ニツイテ爇ハク尺ス、不テ敢増損セ

3 也、今茲劄コトシ劄キケツ成ル自記ヒロセ其所ノ由云ヲ

4 嘉永紀元戊申歲四月

5 平安沢渡広繁画并識

6 熙天保十三年地方にゆく、かねて地方の

7 勝景を摺ものにせん志久しければ、

12 頁

1 しきりにその意うこく、さきに鯨帖を

2 ものすれと、こは手重也、よつて、訪来れる

3 雅客に贈らん料に、幸に下りあひたる

4 精齋にあつらへつけて、つるにこの一冊と

5 なし、地方八奇勝と名つけたり、その詩文

6 読安からんために、隨筆にも取置ぬ

7 安政二年乙卯四月十八日記之

龜岡山人

13 頁

2 (福井村橋の観音の事)

1 ○福井村橋の観音の事

2 志佐福井村に石橋山観音院といふ所あり、

3 瑞雲寺の末寺観音寺の持にて、小堂に観

4 世音の像を安置す、堂の後に自然の石橋

5 ありて、奇絶の景色なり、人の能く知る所

6 なれば、委しくはいはず、爰は地方三十三番の

7 札所の内第一番にて、開基は久保清左衛門

14 頁

1 といふ人にて、天文十三甲辰年建献立といふ、縁

- 2 起等なければ分明ならず、さてこの観音堂
- 3 大破におよひぬとて、再建の願差出ありし有之
- 4 候処、安政四年^{丁巳}六月朔日夜火災ありて、
- 5 堂宇仏体ともに焼失せり、依てまた再建
- 6 の願、且今までは草堂なるを瓦葺にすへ
- 7 し、その入費は領分勸化天明二^{壬寅}年の例に

15 頁

- 1 すへしなんと村方より申出たれと、思ふ所
- 2 ありて、左に記す通り、寺社奉行より観
- 3 音寺へ申渡させぬ、趣意は左の文にて知へし
- 4 志佐 観音寺
- 5 橋之観音堂観音共二一昨巳年焼失之
- 6 処、再建之儀ハ先例も有之由にて御領

16 頁

- 1 分市中在浦勸化相願、仏像之儀は御造
- 2 作にて御出来被下候様願出候得共、御難渋之
- 3 御時節柄二候得は、御造作にて御再興之儀
- 4 難相成、市中在浦追々御用銀被(平出)
- 5 仰付候末二候得は、堂再建之勸化願之通被(平出)
- 6 仰付候儀も難相成、然処、同所は天造之
- 7 石橋にて格別之霊地二候故、中古仏像を安

17 頁

- 1 置致たる物にて可有之処、諸人却て仏像而
- 2 已を致信仰候ては自然之場所二も相叶申
- 3 間敷、且は堂并観音共二致焼失候義は、
- 4 則仏慮二可有之、右二付、観音堂ハ再興不
- 5 被(欠字)仰付候間、以来、石橋を観音之仏体と存
- 6 可致崇敬候、右は格別之(欠字)御趣意も被為
- 7 在候御事故、御手元方御祠堂銀匁貫目

18 頁

- 1 御寄附被遊候条、貸方二致永代其利銀を
- 2 以供養向無懈怠可致執行旨(平出)
- 3 御隠居様被(欠字)仰出
- 4 但、右二付、供養式相勤候仮屋壱軒、御紋
- 5 附御幕壱頭、石之香炉壱ツ、石之花生
- 6 式ツ、石之火灯壱ツ、壱度限御手元方
- 7 御寄附、修復之儀は村中請二被(平出)

19 頁

- 1 仰付候
- 2 右之通御申通可有之候
- 3 安政六年己未二月 月番

4 寺社奉行御中

5 右橋の観音の事は、月番より申達したる

20 頁

- 1 書付の写しにて事分明也、しかして、右夢の
- 2 寄附物も夫々調ひ、供養式も済たれは、昨年
- 3 八月彼岸中に老女等を代参に遣し、事初め
- 4 をさせたり、かく永格をはかりて、事革り
- 5 たれは、随筆にとり置ものなり
- 6 安政七年^{庚申}三月十四日記之

3 (大悲観夢の記の事)

21 頁

- 1 ○大悲観夢の記の事
- 2 ぬは玉の夢には六のしな有とかや、
- 3 むかしより我朝の^(欠字)明王の夢にも
- 4 たふとき^(欠字) 神仏のいちしるく告させ
- 5 給ふためし少からず、また、ことさやく
- 6 もろこしの王侯も夢をは大卜に
- 7 占はしめて、吉凶をわかち、あるひは

22 頁

1 夢によりてかしこき人を得しなと

2 いへるたくひ、古きふみにも多くなん

3 見え侍る、そもく佐々村大別当の観音

4 巖は、そのかみ雄香寺大随和尚、石像の

5 観音を安置されしより、観音巖

6 とは称しけり、去る文政十一年の秋^(平出)

7 上、^(應)長崎へ御越遊され、それより、武雄

23 頁

- 1 温泉に^(欠字) 御入湯ありて^(欠字) 御帰りの時
- 2 十一月五日、大別当へ^(欠字) 御立寄遊され
- 3 御逗留の中に観音巖へも^(欠字) 御出^(平出)
- 4 御覽せられて珍しき岩立なり、この
- 5 巖の中腹に、大悲観と大文字彫
- 6 たらましかは、あはれ仏光世に輝く
- 7 へし^(欠字) 御自筆に遊して賜らんと

24 頁

- 1 仰こと有けるか、同十三年八月十一日^(平出)
- 2 御城に召て、大悲観の御大文字年号
- 3 御位署、御自筆に遊されしを^(平出)
- 4 御手自下し賜りけり、有かたく頂戴し、
- 5 謹て拝見し侍りけるに、^(欠字) 御墨の

6 いろさへ言葉にのへかたし、御文字の
7 惣長さ一丈三尺三寸なん侍りける、

25 頁

1 頓て巖に彫へき旨^(欠字) 仰を蒙りて、
2 とにかくいそきけるほとに、同年九月十五日
3 上、例のことく長崎へ^(欠字) 御越の時、観音巖
4 御覽せんとして、しはしはかり^(欠字) 御立寄
5 遊され、巖のこのものに、しかく彫へき
6 むね^(欠字) 仰置て^(欠字) 御歸りのせつ^(平出)
7 御覽せらるへくまゝ、その間に巖に

26 頁

1 彫へき道造りせよなど^(欠字) 仰付置れ
2 直に長崎へ^(欠字) 御越遊されけり、此観音
3 巖は凡高さ五丈八尺余有て、四方は
4 削り立るかことく、絶壁の岩石なれば、
5 いかゝはして登りうへき、鳥獸ならては
6 とこそ見え侍りか、兼て願ひ置し
7 御城方の御下部のかゝるわさに堪たる

27 頁

1 ものとも、或は田舎の身軽きますらを

2 などをつとへて、さかはり高いいわほの
3 いたゝきにたやすく登りえて、彫へき

4 道造り成ぬ、是偏に^(欠字) 御威光ゆへなり
5 同月廿四日^(欠字) 上、長崎より^(欠字) 御歸りかけ、大

6 別当へ^(欠字) 御立寄遊されて、彫初るをは
7 御覽せられけり、御文字のかたち、大かた

28 頁

1 えり終れるをみそなはさんとて、三四日
2 御逗留おはしましけるに、同廿六日の
3 曉方^(欠字) 御夢の中に、御茶屋の前なる
4 田原とおほしき所に、何鳥なるやらん、二羽
5 居けるか、一羽は鉄炮などに打れたる
6 気色にて、くるしみなやめるさまして
7 居たりしか、観音巖のかたより仏像

29 頁

1 現し給ひ、かくやくとひかりを放ち、かの
2 鳥をてらし給へは、なやめる鳥さもいさ
3 ましくたちあかり、飛去ぬと^(平出)
4 御覽して、御夢さめ給ひにけり、不思議
5 議に^(欠字) 思し召て、よく御按し遊され
6 けるに、個々に御考合さるゝ事の侍りけり

7 そは兼て神仏の霊場へは、大麻手向

30頁

1 御経おさめ、御寄附など色々(欠字) 御信心おは

2 するか中に、京師わたり古き都なんと

3 其外埋れおはす仏像をは繁昌の霊地へ

4 うつしまいらせ給ふ(欠字) 御志おはして、

5 こ、かしこよりもとめ出し給へは、必又、

6 其尊像をは納め給ふへき所も出来て、

7 これかれ符合する事多のみおはする故、

31頁

1 是まであまたの仏像をあなたかなたに

2 安置し給ひけるか、近ころ、奈良よりや

3 出たりけん、また仏像一体送りまいらせ

4 けれど、未いつかたへ納め給はんの御心

5 あてもおはさぬ所、今の御夢に光りを

6 放ち給ひしは、まさしく此仏像の

7 御かたちにておはしけるよとなん

32頁

1 思しめくらされけるその(欠字) 御仏像と

2 いへるは、則白衣観音にして、古代の金

3 紫銅の極て天竺正来の霊像にておはし

4 ませは、かの巖に垂跡し給ひて、国家を

5 鎮護し、殊に谷村事、信心深ければ

6 子孫の繁栄を守り、衆生を済度し

7 普く利益を施し給ふへきの兆

33頁

1 ならんと御夢あはせ遊されて、かの尊

2 像をは(欠字) 御城より大別当へむかへとり給ひ、

3 御前に僕を召て(欠字) 御夢物かたり遊され、

4 かの巖の御文字の下に、厨子形に彫て

5 安置し奉り、なかく信心せよとて、

6 御仏像を(欠字) 御手自御渡し賜りて、

7 ねもころに(欠字) 仰を蒙りしかは、有かたさ

34頁

1 たとへんかたなく感涙に堪すして退き、

2 すみやかに御厨子形にえらせて安置し

3 奉りぬ、されと、此巖に常住置奉らんに、

4 世にはいひしらすさかなきくせもの、

5 侍れは、いかなる無法の事をし奉らんも

6 はかりかたく、かつは人家も遠き里

7 はなれに、あかの水さへたえくならん

35 頁

- 1 ことを恐れなきて、常は御茶屋に
- 2 置奉り^(欠字) 御茶屋守して香花をも
- 3 さ、け、春秋の彼岸、あるいは晴の時はかり
- 4 出し奉りてんよしを申あげ侍しかは、
- 5 其通りに^(欠字) 御許し給りぬ、しかは
- 6 あれと、もし行末いか、あらん事を
- 7 思召て、尚又、当天保四年の春、仏慮を

36 頁

- 1 伺へきの旨^(欠字) 仰を蒙り、彼岸中日に
- 2 大悲観の御前に参り、五通りの御鬘を
- 3 もて伺ひ侍りし所、外に御木仏を
- 4 造りて^(欠字) 大悲観巖の御厨子形の中に
- 5 安置しまいらせ、御本仏は、本宅へ
- 6 移し奉るへきよしの御鬘下りける
- 7 ゆへ、罷歸りて、しかくの旨を申上侍ければ、

37 頁

- 1 上にも^(欠字) 御安心遊されけるとの^(平出)
- 2 御意を蒙り、有かたさいはんかたなし、
- 3 これによりて、白石善慶法橋にものして

4 尊像を刻みまいらせ、かの巖の御厨子に

5 入奉り、御本仏は居宅に新に御仏壇を
6 構へ安置し奉りぬ、扱こそ、朝夕の香花
7 あかの水をも怠らすして、深き^(平出)

38 頁

- 1 上の御恵みを仰き、あらたなる^(平出)
- 2 仏慮を貴み、世に靈光を尊信し
- 3 奉るへけれ、かしこけれと^(欠字) 御ゆめ
- 4 物語りのあらまし^(欠字) 靈像拝領の
- 5 ゆへよしをかいつけ置侍るなり
- 6 天保四^{癸巳}のとし二月 谷村定澄謹識

39 頁

- 1 (※関防印を置く予定であったか。以下、□・○は、印を置く予定の箇所と推測。)
- 2 右夢の記は、そのころ、貞方忠友直に
- 3 筆を起す、其後、定澄の乞に依て
- 4 代書の体にもなし、清書して、
- 5 かの家にわたし置たるなり、源本
- 6 にて珍重すへき品なれば、こたひ、この
- 7 由来を奥書して、印押をく
- 8 ものなり

元治元年^{甲子}十一月吉辰

七十四翁

御名

○

抑いるぬ文政十一年の冬十一月の事なり

けん、小佐々に立寄、大別当の大巖石に

大悲観の三字をものせんとあらまし

して、後に書きて彫せたる事ありき、今は

大悲観といふ地名のことくなりて、人も

信仰するよしなれと、星霜卅七年を

経りたること、殊に当地隠遁の後も

一度歟詣たるのみにて、次第に老境に

いり、多病なれば、おもふ十分の一も行届

かぬ俛にて打過ぬ、しかる処に、おもひきや

側室今子東より下向、爰に住居する

事には成りたり、其因縁をもて、むかしの

大悲尊は如何なりつるや、今子の心得にも

ならんれなれば、すこし時書置せし

夢の記、今の主人吉三さためて所持すへし、

出して今子に見せよと申付たり、夫を

取よせて、また、夢の記を見るものかな

つくくゝと打かへしてよみ見るに、人伝に

聞とは少しくたかへるやふなれば、その

尊像をおかみたと次第して、尋ね

探りて見るに、むかし老人三右衛門

定澄、仏師法橋善慶互に約して

世を去、今迄年経たる由なり、誠に不可

思議の妙智力と申奉らんは、斯の如き事

なるへしと此熙七十四歳の老翁忿発

して、吉三は勿論

須藤了佐

白石妙慶

瀧津 響

5 祭事怠るへからず、しかし是は仕來の
6 通り、法人を離れて、村人の祭るかよし、
7 また、むかへの対の巖石は、陽体にて、山の

1 神を勧進す、祠官山口石見の祭りにて

2 永代替らぬやう心得へし、然れば、谷村の
3 家こそ旧家の上に比類もなき市長と

4
いふへけれ、就ては、愈家事を怠らす、無

5 益の費をなさず、借財等あれば子孫

6 衰微の基衰微しては (欠字) 七宮を初め、

7 大悲觀の尊慮に叶はす、加ふるに

1 此度より上向眷属の住居手当と

2 なる上は、用なき時とて茶屋向の修覆

3
みかしめ等麁畧に心得ては相成らず、

4 依て、表より請る処の扶持方は、家内睦敷

5 くらしつとむるの扶持とし、修覆料は

6 橋の茶屋の朽はてぬやう、新田高は

大別当の子孫に伝はるやう弁別し、

混雜せぬやうに必然第一神仏を信敬

すへし、志方新田は隣新田の事、殊に

常平所にて重に祭料に用ふる大切

なる新田なれば、今度、泰邦寺祈祷

所と定むる上は、志方新田初穂米と

して、永く米壺俵宛寄附するに

極めたり、大別当新田所よりも同寺を

格別に崇め、永代不変を祈るへし、是等

の事も因によつて書添をくもの也

元治元年
子甲

十二月書て

谷村吉三

定益に与ふ

追加

本文大悲觀山の神の辺は谷村か先祖の

拝領地にてはなけれど、むかし小坂村の内

より買入たる地面のよしなれば、此わたり

皆谷村が一円の内なり、然は御拝山より

6 大悲観を拝しかく御仏縁も次第に
7 厚うなれば、大悲観山の神は谷村か

56 頁

1 家より見かしめ世話し奉らんこと
2 勿論なり、後年のため追記す
3 あくる丑の

三月吉辰



57 頁

1 ○
2 一 先年覚然法印安満岳住職中ニ佐々泰
3 邦寺ハ隠居仕候積り御座候得共、三四人暮方ニ
4 受納物少々不足相成候故、郷中祈願向も可致
5 ニ付、郷米種々申談呉候積相談有之候得共、出
6 来不申旨^(欠字) 上え御咄被申上、其後、法印は冷水へ
7 隠居致候、然ル処、一昨子秋右寺へ^(欠字) 観音尊御

58 頁

1 安置相成候ニ就て、先年覚然申上居候事^(平出)
2 思召被出、尚又、郷米之義、小佐々奥附、其外え
3 御沙汰有之、余程心配致候得共、兎角、六ヶ敷
4 出来不申、折角厚キ^(欠字) 思召之事故、炭山へ

5 相談有之候得共、是又、一統ニ懸り候ては六ヶ敷
6 候得共、草刈太一左衛門・久原繁左衛門・炭福屋又兵衛・
7 吉留仁四郎、四人ニて老人前金廿五兩宛、合て百兩

59 頁

1 上え今度献上致候、此百兩直ニ泰邦寺へ御寄
2 附被遊候間、派中御預り申上、例之歩廻し
3 致、利足金拾兩宛年々受納物ニひかへ御宛
4 行同様相心得候様^(平出)
5 御隠居様被^(欠字) 仰出候、以上



慶応二^丙十月^寅

御取次之者

60 頁

真言

御寺々

3 右泰邦寺祠堂金十月七日正安寺呼出し
4 了佐より相渡し済たれば、金子献上の
5 四人え木綿染地紋付同様にして、骨折を
6 賞しとらず、尤十月十一日

61 頁

1 罷出たれば、是又、了佐方四人分一同相渡

させぬ

慶応二年^{丙寅}十月書

御請

今度佐々泰邦寺え金子百両^(平出)

御隠居様厚キ思召を以御寄附被^(平出)

62頁

仰付、派中一統難有仕合奉存候、右は先年

覚然安満岳住職中泰邦寺へ隠居仕候

積ニ御座候得共、三四人暮方ニ受納物少々

不足相成候故、郷中祈願寺ニ可仕候ニ付、郷米

程々申談呉候様相談仕候得共、出来不仕旨^(平出)

上え御咄被奉申上、其後、覚然儀は冷水へ

隠居仕候、然ル処、一昨子秋、右泰邦寺え^(平出)

63頁

観音尊御安置ニ相成候ニ就ては、先年、覚然

言上仕候事共を被為出^(欠字) 思召、尚又、郷米

之義、小佐々奥附衆、其外え御沙汰被^(平出)

仰付候て、余程心配有之候由之処、兎角出来

不仕、折角厚キ^(欠字) 思召之事故、炭山へ御

相談相成候得共、是又、一統ニ懸り候ては六ヶ敷候

故、草刈太一左衛門殿・久原繁左衛門殿・炭福屋

64頁

又兵衛・吉留仁七郎、四人にて壺人前ニ金貳拾

五両宛合て百両^(平出)

上え今度献上ニ相成、此百両直ニ泰邦寺へ御寄

寄附被^(欠字) 仰付候間、派中ニて御預申上、例之

歩廻シ仕、利足金拾両宛年々受納物ニ取加へ、

御宛行同様相心得候様^(平出)

御隠居様被^(欠字) 仰出候旨、難有、派中一統奉

65頁

畏候、然ル上は右御金、派中ニ御預り奉申上、歩廻シ

仕、年々拾両之支分右寺受納ニ相成候様可仕候、

乍恐右之段御請奉申上候、以上

正安寺

慶応二^{丙寅}年十月 随範九拝

神能寺

覚範九拝

66頁

観音印

寛田九拝

金胎寺

3

2

1

4

3

2

1

7

6

5

4

3

2

1

1 67 7 6 5 4
頁

道雄九拝
談議所
盛維九拝
印山寺
覚仁九拝

【
終
わ
り
】